

## 施政方針演說

## 反省なき「決断」の強調

國政審議論を経てこない「決議」を、事後的に説明する場だ

首相の言葉は、とても額面通りには受け取れない。

は、福島の被災者をはじめ、幅広い国民の納得は得られまい。

と心得ているのなら、国会騒ぎもほんはだし。「結論ありき」での方針転換への反省がなければ、岸田首相が今回も掲げた「信頼と共感の政治」は看板倒れのままだろう。

通常国会がきのう召集され、  
首相が施政方針演説を行つた。

論」「検討」の上に「決断」したり、「議論」、議論に移す曾みだとの考え方を示した。「検討」「決断」「議論」のすべてが重要かつ必要な論いながら、政府の「決断」に力点があるのは明らかだ。

首相は今の日本が「歴史の分岐点」に立っているとの認識を示したうえで、まず、「防衛力の抜本的強化」を取り上げた。防衛予算の大幅増や敵基地攻撃能力（反撃能力）の保有、南西諸島の防衛体制の整備などを列挙、「1年を超える時間をかけて議論した」と述べた。

去年の施政方針演説では、頭で詳述した、新型コロナ対策はすっかり後景に退いた。この春に感染症法上の位置づけを見直す方針などが示されたが、医療現場の逼迫は続き、死者もな nombreux。分類変更のリスクを含め、国民への丁寧な説明が必要なことを忘れてはいけない。

しかし、大半は政府・与党内の見えないところで行われ、首相が公には「検討中」を繰り返したことから、国会ではまともな議論にならなかつた。異論にも丁寧に向き合ひ、多角的な検討が広く行われた形跡はない。

昨年末に政権が相次いで打ち出した、安全保障政策と原発政策の大転換に対する自負が透けて見える。しかし、いずれも「決断」に至る過程には、大きな瑕疵がある。「慎重の上にも慎重を期して検討」したむづか

自ら「大転換」と位置づけた  
安保政策には、1項目を割く  
方で、原発の積極活用では、廢  
炉となる原発の建て替えや運転  
期間の延長などに簡単に触れた  
だけ。なし崩しの転換を象徴す  
るような扱いであり、これで

と述べた。ただ、再発防止に取り組むにしても、具体策は明確でなく、教団と政治の関係の全容解明にも言及はなかった。もはや終わった問題だと片付けられ、信頼回復はおぼつかないところであった。